

万葉集卷十四と挽歌

櫻井満

序

東国地方の民謡によつて形成された万葉集卷十四の巻末には「挽歌」の部が立てられ、次の一首が採録されてゐる。

愛し妹を 何地行かめと、山菅の 背向に寝しく 今し悔しも

(三五七七)

いはゆる東歌として、この一首だけが「挽歌」とされたのである。

この歌は、見方によつて相聞歌とも解釈されるが、卷七に、

わが夫子を 何処行かめと、さき竹の 背向に宿しく 今し悔しも

(一四一二)

と類歌があつて、これも「挽歌」の部に属してゐるところをみると、卷十四の「挽歌」は、資料としたものに「挽歌」とすべき根拠があつたとみるべきであらう。

しかしこの東歌の一卷に、はじめから「挽歌」といふべき歌があつたのであらうか。東歌が、東国の国々の風俗歌として、荷前貢進の折などに、服従を誓ひ忠誠を表明する意義をもつて、奏上せられたものが、歌舞所といふべきところに伝へられたものとする折口信夫先生の明断は、東歌の本質論として認めなければならない。この

東歌の本来的な意義を考へ、併せて卷十四の構成形態を検討してみると、何としても「挽歌」の存在は疑問である。

卷十四の未勘国の歌にだけ部立された「防人歌」と「挽歌」は、後の増補編入によるものではないか、と推測されるのである。そしてその追補者は大伴家持であつたに相違なく、その時期は俄に定め難いが、左大弁の時代（天応元年Ⅱ七八一）といふ愚按をめぐらせてゐる。小稿では、紙数の關係で卷十四の構成と「防人歌」に関する問題を割愛し、万葉学宗佐佐木博士追悼の論としては、余りにささやかであるが、「挽歌」とその周辺の問題に限つて試論を展開してみたい。

一、挽歌と恋歌と

もとより万葉集の部立を全面的に信用することは出来ないのであるが、卷十四の「挽歌」と標題する一首は、必ずしも挽歌とみなければならぬといふ歌ではない。即ち「何地行かめ」の句と、「背向に寝しく」を中心に見る考へ方から言ふと、男女相許うて、解けて寝なかつた夜から、相手の心が自分を離れた（折口信夫全集第十卷「東歌疏」）とも解せられるのである。特に万葉集に限らず古代の歌謡にあつて「昔」

の表現は、恋情発想にまつはる場合が極めて多い。これが根柢には、昔に籠つて常世の稀人神を待ち齋く、古代農耕社会に於ける女性の宗教生活が源流してゐることは、既に詳述したことがある。⁽²⁾

さて「挽歌」は、中国伝来の名称で、柩を挽く時の歌の義であるが、万葉集では人の死に關係した歌をひろく「挽歌」と称してゐる。しかし挽歌と恋歌とは、折口説に詳細な通り、本来別々のものではなく、「魂乞ひ」——招魂・魂呼びひ——の呪術歌として同一性格のものであつたのだ。「相聞」も中国伝来の言葉で、その原義は、「相聞往来」の語が用ゐられてゐるやうに、互に消息を問ひ交はす義から出てゐることは明白である。万葉集では、その唱和といふ根本義を忘れて、一首独立の相聞になつてしまつてゐるものが多いが、東歌ではいくらか唱和の面影を察することが出来る。それは本文に立てられた歌と左注された或本の歌とである。これが一對の唱和の歌であつたとみられる場合が多い。

本来、相聞は日本古代の祭儀の場合の神と人——神と巫女との「かけあひ」の歌として発達したものであり、それは表現上の習慣として、恋愛発想に傾くのは当然であつた。そして相手の魂を自分の方へ迎へようとする呪術——即ち「魂乞ひ」が「恋ひ」の本義であり、その「恋ひ」が文学に成長して行くのであつた。挽歌は死者に向けての「魂乞ひ」である。逸脱し天翔り去つた靈魂を、もう一度死者の体内に呼び戻さうとする——「魂呼びひ」の呪術のものであつた。その中から死者の魂を呼びよせることが忘れられると、挽歌も恋歌のやうにみられて来るのである。要するに魂乞ひの呪術歌が生死両面へ乖離移行したにすぎないのであつて、相聞歌であるの

か挽歌であるのか、今日からみると判然としないものが多い訣である。

明らかに同一発想をとりながら、相聞歌と挽歌とを形成してゐる例がある。東歌、未勘国の相聞歌に、

我が面の忘れむ時は、国はふり嶺に立つ雲を 見つつ偲はせ

(三五二一)

対馬の嶺は下雲あらなふ。上の嶺にたなびく雲を 見つつ偲はも

(三五二一)

面形の忘れむ時は、大野ろにたなびく雲を 見つつ偲はむ

(三五二〇)

と「雲を見つつ偲ぶ」といふ三首の類型歌がある。これは卷二の挽歌「柿本朝臣人麿の死りし時、妻依羅娘子の作る歌」の一首に、

直に逢ふは、逢ひかつましじ。石川に雲立ち渡れ。見つつ偲はむ

(二二二五)

と同一発想であること明らかである。なほ、この人麿終焉歌の構成——石見の国にありて臨死らむとする時、自ら傷みて作る歌/人麿の死りし時、妻依羅娘子の作る歌/丹比真人が人麿の意に擬へて報ふる歌——と、その歌をみると、如何にしても、「鴨山の磐根し纏ける……」と死ぬ時の歌が伝はるわけがないのに、ここに人麿終焉歌が記録されたのには何か理由がなければならぬ。目下のところ挽歌伶人といふべき人麿の終焉譚を語り歩いた巡遊伶人があつて、彼らの口に歌はれて定着したと推察してゐるが、この小野神を布教した筈の柿本族人の漂泊巡遊の旅が、東国にまで及んで、東歌と柿本朝臣人麿歌集との関りが生じたとも解せられる。

さてこの挽歌にも恋歌にもみられる「雲を見つつ偲ぶ」といふ発想は、卷二十の防人歌にも受けつがれて行くのであるが、魂乞ひといふ靈の呪術に由来するのであつた。⁽³⁾

挽歌の生命は、人麿を頂点として衰滅の傾斜を急にし、万葉時代をもつて完全に終るといつてよい。それが長歌の生命をも意味することは、山本健吉氏の洞察に従ふべきである。生と死との断絶を理會し、殯宮の行事が完全に形式化した時代になると、誄詞から分化した長大な挽歌の意義は失はれてしまふ。さうしたいはば叙事詩のさばりの部分ともいふべき抒情部分が、短歌として独立して来るとみてよいのである。さうして独立した短歌は、既に長歌の世界に精彩を發揮した「挽歌」といふよりは、挽歌的発想を結晶した哀傷歌といふべきものに昇華する。それが一方では、同じ「魂乞ひ」の呪術歌から出発する恋歌として成立する、といふ場合もあつたに違ひないのである。

二、木綿間山隠れし君

卷十四で、ほかの部立の中に、挽歌ではないかと疑はれてゐるのは、次の未勅国の相聞歌一首くらゐのものである。

恋ひつつも居らむとすれど、木綿間山 隠れし君を思ひかねつも

(三四七五)

これには卷十二の「悲別歌」に類歌がある。

よしゑやし 恋ひじとすれど、木綿間山 越えにし君が思ほゆる
くに (三一九一)

とあり、さらに卷十の「秋相聞」夜に寄する三首中に、

よしゑやし 恋ひじとすれど、秋風の寒く吹く夜は君をしそ思ふ
(二三〇一)

といふ形に成長して行つてゐる。
松岡静雄氏は、ユフマ山は岩窟地区のある山の称とみ、「岩窟は死体を収殮するに適するのみならず、ユフといふ語は本来夜間の意で、夜間は靈魂の世界であるから、ユフマ山に隠れたといへば死去の義と了解せられるのである」とし、「此は明白なる哀悼歌で、相聞中に編入したのは編者の誤解に基くものであらう」(『万葉集論究第二編』)といはれた。氏はほかに三四八五・三五一三の二首も「分明な挽歌」としてゐられるが、これは特にさうみる必要は認められない。

しかしこの東歌の木綿間山の歌は、挽歌といふより「隠み妻」の歌とみることが出来る。ユフマ山といふのは確かに夕間山で、アサマ山(朝間山―浅間山)に対するものかも知れないが、そのターユフの本質は、やはり神祭りの木綿であつたに違ひない。朝・夕が神祭りの麻と木綿に關聯するであらうことは、高崎正秀先生がしばしば申されるところである。木綿は幣帛として神に奉るもので、「木綿襪」或いは「木綿懸けて」「木綿取り垂でて」齋ひ祭ることが、本集にもしばしば歌はれてゐるのであつて、ユフマ山は所在不明であるが、神聖な祭りの山であつたに相違ないのである。その木綿間山に隠れたと解釈出来る。

「隠み妻」の古代伝承をみると、「古事記」雄略天皇金鉏の岡の条に、

また天皇、丸邇の佐都紀の臣が女、衰耜比売を嬪ひに、春日にい

でましし時、嬖女、道に逢ひて、すなはち幸行を見て、岡辺に逃げ隠りき。かれ御歌よみしたまへる、その御歌、

嬖子の 隠る岡を 金銀も五百箇もがも。鉤き撥ぬるものとあり、「出雲風土記」出雲郡宇賀の郷の条には、大穴持命と陵門日女命について、「肯はずして逃げ隠り給ひき」とあり、「播磨風土記」賀古郡比礼墓の条、景行天皇と印南別嬖の場合には、南毗都麻の島に逃げ渡つたのを探し出し、「この島の隠愛妻」と申されたといふ。即ち「隠み妻」は、求婚された女性が逃げ隠れるといふ発想で、隠れる場所は、山ばかりでなく海を渡ることもあつたのだ。

柳田国男先生は「海南小記」南の島の清水の章に、沖繩諸島の久高島で、最近まで行はれてゐた興味深い「刀自覚め」の民俗を紹介して下さつた。即ち「此島では人の妻となる者は、必ず祝言の席上から遁げ走つて、十日二十日の間新郎に捕へられぬやうに力めねばならなかつた」「今の外間のノロクモイの如きは、七十二日の間見付けられなかつたと自慢して居る。囲周一里とすこしの小島の内ではあるが、御岳の中には男子が憚つて入らぬ為に、これへ遁げ込めば何日でも捕へられずに居ることが出来た」「新郎は多くの友人の助力を頼み、實際血眼になつて捜しまはり、つかまれば又髪の毛を鷲づかみなどにして、手荒い折檻をするのが作法である」といふ。まさにわが古代習俗の命脈を、沖繩の一つの離島が保つてゐたのであつた。

要するに「隠み妻」は、掠奪婚に対して逃走婚といふ方式である。東歌には、ほかに上総国の相聞歌に、

馬来田の嶺ろに隠り居、かくだにも。国の遠かば、汝が目欲りせ

む

とあり、これも「隠み妻」を語つたものとみてよいであらう。かうした隠み妻は、古代女性が神に奉仕する期間だけ忌屋に籠る意義と一脈通するものがあるが、「隠る」と「籠る」との間にはなほ検討の要があらう。この二首の「隠み妻」の歌は、「物語」と呼ばれたいはゆる旧叙事詩の抒情部分が脱落遊離し、地名と結びついて伝承されたとみてよいものである。

三、東歌の挽歌的発想

東歌の中にも挽歌的発想を見出すことは出来る。例へば、相模国相聞歌の

相模嶺の を峯見そくし 忘れ来る妹が名呼びて、吾を哭し泣く
な
(三三六二)

或本歌曰、武藏嶺の を峯見かくし 忘れ行く君が名かけて、
吾を哭し泣くる

である。尤もこれは、同じ相模国相聞歌、

足柄の 御坂畏み、曇り夜の 吾がしたばへを 言出つるかも
(三三七二)

と同じく、卷十五の中臣宅守の

畏みと告らずありしを、み越路の手に立ちて、妹が名告りつ
(三七三〇)

と歌はれるやうな、坂の神に自分の恋人の名を告白し懺悔する一つの例ともみられるのであるが、私には「妹が名呼びて」の発想に「魂呼ばひ」の呪法がひそんでると考へられるのである。

「魂呼ばひ」は、今日の民間伝承に、(一)枕もとで死者に向つて呼ぶもの (二)屋根または高い所に登つて呼ぶもの (三)山・海・井戸などに向つて呼ぶもの といった三つの形式がある。肉体から遊離した靈魂を呼び戻して、死者を復活させようとする呪術で、記録としては、早く小右記万寿二年(一〇二五)の条などにあらはれ、中国では古くから「復」といふ亡魂を招く祭がある。⁽⁴⁾

相模嶺は相模の国魂の籓る最も神聖な山、今、阿夫利神社のある大山であらう。相模のお山であつたのだ。その峰を遙かに見やつての「魂呼ばひ」の呪術歌が根底にあつたものとみられる。古代人にとつて死といふことは、遊離した靈魂が体内に戻らないことを意味したので、人が死ぬとまづ死者の名を呼んで魂呼ばひし、さらに殯の儀を行つて、靈魂の蘇生復活を図つた。遊離した靈魂の鎮まる場所としては、山を觀想したのであつた。人麿の時代には、生と死との断絶を理會し出しているから、既に儀式化し形式化して来てゐるのであらうが、卷二の「妻の死りし後、泣血哀慟して作る歌」の反歌に、

秋山の黄葉を茂み 迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも 一に云ふ路知らずして

(二〇八)

と歌はれてゐる。

ここまでみて来ると、未勘国雜歌に、
(一)東路の手兒の呼坂。越えがねて、山にか寝むも。宿はなしに

(三四四二)

同相聞歌に、

(二)東路の手兒の呼坂。越えて去なば、吾は恋ひむな。後は逢ひぬ

とも

(三四七七)

と二例ある「東路の手兒の呼坂」も、かうした魂呼ばひの対象となつた坂であつたことが理會されるであらう。東国の処女が亡き人の魂——名を呼びつづけたといふ伝説があつて、かく呼ばれた坂であるに相違ないのである。さうした坂には坂の神——道祖神信仰があつたに違ひない。道祖神は汎称の通りサへの神であり、それは同時に、生者と死者、人間界と幽冥界の境を司る神の意であつた。或いは、坂の語原はサク、(放く・離く・裂く、但しこれは四段活用であるから名詞形はサキになるが、崎も坂も同根語であらう)で、それがハ行に再活用してサカフ、その名詞形がサカヒ(境)であつたかもしれない。とにかく「坂迎へ」の民俗などでも訣るやうに、坂は境としての印象が濃厚である。

かうした坂や峠には、行路病死者の靈が現はれるといふ伝説が語られることが多く、夜間の通行を忌まれたりしてゐる。「東路の手兒の呼坂」とはさうしたところであつたのだ。それではじめて(一)の歌の「越えることが出来なくて、山に寝なければならぬのか。仮寝の場所もないのに」といふ三句以下が理會できるのである。(二)の歌にしても、この坂が境になつて、向うは自分らとは異なる世界——異郷だと感じての表現である。

「手兒の呼坂」の所在地は不明といふべきであるが、下河辺長流の「統歌林良材集上」所引の駿河風土記逸文がその伝説を伝えてゐる。勿論古風土記のままとは見難いがあげてみよう。

するがの国の風土記に云、蘆原郡不来見の浜に妻をおきてかよふ神あり。其神、つねに岩木の山より越て来るに、かの山にあらぶ

る神の道さまたぐる神ありて、さへぎり不^レ通。件の神あらざる間をうかがひてかよふ。かるがゆゑに來ることかたし。女神は男神を待として、岩木の山の此方にいたりて夜々待つに、まち得ることなれば男神の名をよびてさけぶ。よりてそこを名付て、てこの呼坂とすと云々。

とあり、續けて「てことは、東俗の詞に女をてこといふ。田子浦も手子の浦なり」とし、(一)の歌をあげ「上二首はかの男神の歌といへり。女神の歌にはく、岩木山 ただ越えきませ いほさきのこぬみの浜に 我たちまたむ」としてゐる。岩木山の歌は、万葉集卷十二の三一九五に見えるもので(小異)、後世の付会説であらうが、唱和の歌として説いたところが面白い。確かに「東路の手児の呼坂」の歌には、歌物語的な背景が考へられるのである。(二)の歌には、卷十二の悲別歌に、

朝霞たなびく山を越えて去なば、われは恋ひむな 逢はむ日まで
に (三一八八)

雲居なる海山越えていゆきなば、われは恋ひむな 後は逢ひぬと
も (三一九〇)

みさごゐる渚にゐる舟の榜き出なば、うら恋しけむ 後は逢ひぬ
とも (三二〇三)

と三首までも類歌がみられる。これが単に民謡の流動性によるものでなく、恋ひこがれる人の名を呼びつゞける、あづまをみな悲恋物語を語り歩いた漂泊巡遊伶人があつて、各地に撒布したのかも知れない。要するに舞台となる背景が違ふだけの類型歌である。

東歌を抒情的叙事詩・叙事的抒情詩として観照するのが折口説で

あるが、高崎先生はそれを「東歌といふものは、抒情的叙事詩と名づくべきもので、「物語」と呼ばれた旧叙事詩——極めて原始的な身振劇的なものに合はせて、一種の漂泊舞樂者・巡遊伶人の徒の口に歌はれて、全国的に撒布された——の抒情部分が脱落遊離して、それが地名と結びつくことにより、土地土地に根生ひのものの如き風貌をとつた民謡で、今日残る僅かな諸例からも、国のはしほしにおいて、著しい類同性が発見されるのは、民謡の流動性といふこと以前に、既に発生的に見て、巡遊伶人の輩の果した役割を認めねばなるまい(『万葉集における防人歌』と断言してゐられる。即ち古代演劇の台本としての旧叙事詩の存在を、東歌の背景として認めるのである。かうした発生的な理會なしに、東歌の発想に關する問題を扱ふことは出来ないのである。

東国の風俗歌として奏上された筈の東歌の中にも、僅かながら挽歌の発想が認められるのであるが、それは既に民謡化されたものの中に、かすかに痕跡を留めてゐるにすぎないのであつた。とても純粹な挽歌の存在は考へられない。

結

万葉集卷十四の東歌は、その本来の意義からすれば、天子の万葉を祝福するといふ主題が中心になるべきだといへよう。例へば国歌「君が代」の「一先蹤といふべき未勘国雜歌の

花散らふ この向つ嶺の平那の嶺の 洲につくまで 君が齡もが
も (三四四八)

といつた賀歌的発想がとられて來る筈であるのに、実際には東国の

民謡として恋愛発想の歌が多い。しかしこの一見矛盾と考へられる事実は、決して矛盾ではなかつた。それは折口説に委曲が尽くされてゐる通り、後の東遊歌や風俗歌にみて明らかであり、また東西の国々から荷前の使によつて、鎮魂祭・新嘗祭などの時に奏上される国魂奉獻の風俗歌は、要するにその国の民謡であつた。後には悠紀・主基両国が代表するやうになつたが、東歌も同じこと、大和宮廷の歌舞所・大歌所といふべきところに、年と共に堆積したものである。この東国の風俗歌が東歌の根幹になつたのであるから、東歌本来の意義からすれば、本巻に文字通りの「挽歌」が伝承される理由がないと断言してよい。ところが挽歌とも相聞歌とも区別のつけ難い歌を、わざわざ「挽歌」として、しかも巻末に一首だけ編入されてゐるのが事実である。如何にしてもこの巻十四の構成には、東歌の本来的意義を無視した何者かの手が加はつてゐるものとみななければならぬ。

武田祐吉先生は「後人が歌詞によつてこの標目を立てたのだらう」(『全註釈』)と推測されたが、「防人歌」同様、資料としたものに「挽歌」とすべき根拠があつたとみるべきである。要するに後の切継である。それは別途詳述するが、大伴家持が巻十四に「防人歌」を追補編入した時期に、東国流伝の挽歌を東国民謡の巻末に補入し、東歌一巻としての形態を整へようとしたと推定して大過ないであらう。補入時は、内舍人とか兵部少輔といった時代ではなく、宝亀五年(七七四)に相模守・上総守を歴任し、伊勢守を務めた後、宝亀十一年二月、参議となつて帰京した時から翌天応元年左大弁の時代と推定することが出来る。伴氏系図に従へば、天応元年は家持

六十四才である。この推定は宝亀二年以後補正説とも符合するのであるが、合制に於いて、雅楽寮は左弁官の管轄する治部省の下にあつたのであるから、左大弁になつた天応元年五月七日から翌延暦元年正月十九日、因幡国守氷上真人川継の謀反に連坐して解任されるまでの間が最も可能性が濃い。更にはこの八ヶ月余の間に、巻十四だけでなく、万葉集全体を補正したと推測することも出来る訣である。

(昭和三十九年二月)

注(一) 全国大学国語国文学会春季大会で発表の予定。(六月^{日国学}院大学)。その母体である拙稿「万葉集巻十四の追補」が小論に先行するものである。諒想を乞ふ。

(二) 昨年七月二十二日、万葉研究連合大会で発表。近刊の「美夫君志」に「恋愛発想と菅・民謡化の「典型」」として収載。

(三) 「折口信夫全集」第十三巻所収「東歌疏」(もと「万葉集総釈第七巻」)。鈴木正彦氏「嶺に立つ雲を見つつ偲ばせの解釈について」(『万葉集研究』一)に詳細。

(四) 藤野岩友先生「巫系文学論」

(五) 注(一)の機会。